

やさぎ



「歎異抄」(第二十七回)

標 暁 講述

「歎異抄」 第十二章 続き

故聖人のおおせには、「この法をば信ずる衆生もあり、そして衆生もあるべしと、仏ときおかせたまいたることなれば、われはすでに信じたてまつる。またひとありてそして、仏説まことなりけりとしられそうろう。しかれば往生はいよいよ一定とおもいたまうべきなり。あやまつて、そしてそのそうらわざらんにごそ、いかに信ずるひとはあれども、そしてひとのなきやらんとも、おぼえそうらいぬべけれ。かくもうせばとて、かならずひとにそれられんとはあらず。仏の、かねて信誨ともあるべきむねをしらしめして、ひとのうたがいをあらせじと、

ときおかせたまうことをもうすなり」とこそそうらいしか。いまの世には学文して、ひとのそしりをやめ、ひとえに論義問答むねとせんとかまえられそうろうにや。学問せば、いよいよ如来の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかが、なんどとあやぶまんひとにも、本願には善惡淨穢なきおもむきをも、とききかせられそうらわばこそ、学生のかいにてもそうらわめ。たまたま、なにころもなく、本願に相應して念仏するひとをも、学文してこそななどといのおどさるること、法の魔障なり。仏の怨敵なり。みずから他力の信心かくるのみならず、あやまつて、他をまよわさんとす。つつしんでおそるべし、

光照寺寺報

発行所
宗教法人光照寺

〒331-0821
さいたま市北区別所町102-2
電話：048-651-2781(代)
FAX：048-651-2753
E-mail
yasuragi@beige.ocn.ne.jp
ホームページ
http://www8.ocn.ne.jp/~koshoji

発行人
池田孝郎

先師の御ころにそむくことを。かねてあわれむべし、弥陀の本願にあらざることをと云々

(真宗聖典六三二頁)

仏さまがさとりの世界から説いて下さったからと云って全部その通りだと、有難いと云って受け取らないということがある。誘う人が無くなつて仏説まことというのではなく、誘う人があることにおいて仏が説かれた念仏往生の説というものはまことであると分かせてもらえらる。こういうことが逆説的であり、我々の常識を突き、常識を破っている。

『浄土論註』を見ると仏法の真実の言葉は常人には入らないと書いてある。常識を超えた言葉です。非常識ではなく、超常識の言葉です。ですから、普通

の人の耳には入らないと曇鸞の『浄土論註』には書いてある。誘う人があるから仏説がまことであるというのが分かるのだと、こういうことは常識では考えられない。ところが、唯円大徳は堂々と云っている。親鸞聖人の仰せとして記憶しているのである。単に親鸞聖人のお言葉というのではなく、親鸞聖人のご領解をここに述べておられるわけですから、親鸞聖人のお言葉と同時に唯円大徳のお言葉でもあるわけです。

「信誘ともにあるべき」という、信ずる人もいれば、誘う人もある。誘う人を一所懸命無くしていこうと望んではならない。ご縁があつて、信ぜさせていたただくのである。

(当寺) 法話抜粋要約、文責副住職 釈徹照



孟蘭盆会法要

報恩講

十月十五日(日) 十時

厳修

詳細は三頁

何故仏教が日本に受け入れられたのか。という素朴な疑問がこのところ私の胸に去来する。

お釈迦様がお悟りになられ、インド、中国、朝鮮、日本へと仏教が伝来した。そして、今日、この私のところまで南無阿弥陀仏として至り届いて下さった。その至り届いた南無阿弥陀仏が真としてこの私をして歩みしめて下さる。

それはどうしたことであるのか。このことについて今回は考えてみたいと思ったことです。

まず第一に思ったことは、何故仏教という大きな教えを日本人が



受け入れることが出来たのか、という問いから紐解いてみようと思ふ。

単純な発想ですが、一つのヒントは、大きな盛るものは、大きな受け皿でないと盛れない、という事実です。大きな盛るものが小さな受け皿では溢れてこぼれてしまうのです。とするならば、仏教を受け入れることが出来た日本人の精神世界が大きかったと考えることが出来ます。

その精神世界を表わし、伝えて来たものは「言葉」に象徴されるでしょう。日本には古来より「言葉」として、言葉には不思議な力が宿っていると感じるデリカシーな感受性を日本人はD・N・Aの中に持っているのでしょうか。

日本人の言葉として日常当然として使われている言葉に実は大きな精神世界を既に感じ伝えていると感ずるのです。

その一つが「有り難い」です。本来無いものが、今、こうして有るという驚きの感受性です。英語の「サンキュー」という感謝を意味する言葉の響きのニュアンスより奥深いと感じるのは私だけでありましょうか。この感受性の言葉に「あるがまま」を受容する感性が用いていると思われまふ。これは全受容の感性の表現と思われまふ。

この感性が大乗仏教の神髄の言葉の表現である「諸法実相」を理解し得たのではないかと思うのです。親鸞聖人も日本は「大乘相應の地」であると表白しておられます。大きな大乘仏教の教えを、スーッと受け入れる土壌（土徳）が既にあったと感じられます。

次に古語としてある日本人の感性に「物の哀れ」があります。この感受性こそ仏教の「諸行無常」と一致します。広辞苑を引くと、『もの』すなわち対象客観と、『あわれ』すなわち感情主観の一致する所に生ずる調和的情趣の世界」とあります。まさに大和心と仏教の大いなる悟りの表現が一致いたします。

次に仏教の空の悟りを表現する言葉に「縁起の法」が説かれます。お釈迦様の初転法輪よりお悟りの内容を「縁起」（十二因縁）として説いて下さいました。「すべてのものごとは縁によつて起こる」といわれ、お釈迦様は「縁の発見者」ともいわれる根本的道理の表現です。私が推測すれば、仏教の縁を「えにし」と呼称して来た日本人がおり、古来より古語とし、大和言葉として「えにし」と呼ばれて来た言葉の伝承があったのではないかと思うのです。故えに、南無阿弥陀仏と言葉となった仏も

理解し、受容出来たものといったいのです。南無阿弥陀仏、合掌。

真の依り処

「業」、世間ではわざわざいって福となるなどと耳にします。この業ということばを私は佛法に出遇わして頂くまで、恥ずかしいかな愚か者ですのでもできたないもの、いやなものと思っておりました。聴聞させていただき初めましたら、この業をもつ自分をいとおしく感じ又大切なのち「身」であると深く感動させられました。誠にありがたく思いました。この業は阿弥陀様よりおあずかりさせて頂いているのですもの。毎日業にうまれ業に暮れているのです。私の友人があることで困っているといいますが、業とは境遇と同じでその人をとりまくすべての関係や、めぐりあわせのこと、誰れもが通らなくてはならない大切ないのちであることが解ってくれまして二人で歡喜あいました。

岡田ノリ子

鈴の音

すべての自力は、他力に
ささえられてあったんだ
（還るところはみなひとつ）
鈴木 章子

報恩講

報恩講

- ・10月25日(日)
午前11時～3時まで
(10時30分受付)
- ・日中法要厳修
- ・お斎(お食事)
- ・法話 樸暁師
(元教学研究所所長、
法泉寺前住職)
- ・講題 真実の宗教
一私にとって報恩とは一
- ・場所 光照寺本堂

※準備の都合上、出席の際はお寺にご連絡下さい。

【報恩講は宗祖、親鸞聖人のご恩徳に報謝し、いのちの道理を深く尋ねる法要で、一年の中で最も大切な仏事です。真宗門徒として必ず勤める法要であり、光照寺の今年度最後の大きい法要です。是非ともご参詣下さい。今年も樸暁先生をお迎えして厳修致します。】

時は国民の圧倒的支持と期待により、自民党政権から民主党政権へと移り変わった。民主党におい

昨年、樸先生のご法話で『教行信証』総序の「円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智」というご文を挙げて「本願力の自然によつて悪が転じて徳と成る世界が明らかにされているのが真実の教え。それを会得させていただくことが信心獲得ということですよ」と、「転悪成徳」ということをお話されています。

でも民主党に変わってよかったというところが国民に伝わらなければ瞬く間に転落の途を辿るということが想像されます。

政治の世界だけの話ではなく、我々の日常生活において、好条件が整うとよかつたと思ひ、悪条件にさらされると落ち込むということが多々あります。

ではこれから国民の厳しい視線にさらされながら実行力を発揮しなければならぬ。すべての公約が実現されると思わなければいけません、ひとつも、ひとつ

我々は、善悪の二対項で物事を分別しますが、現実には割り切れない問題を抱えています。「転悪成徳」という智慧の眼がなければ苦悩から解放されることはありません。

どうしたら、転じられ苦悩から解放されるのかという問いが起こつてきますが、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつて、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」という世界に遇うしかないと思ひます。具体的にはそういう世界を生きている師に遇うしかないと思ひています。

ご家族、縁者お誘ひ合わせの上、ご参詣下さい。お待ちしております。

副住職(釈徹照)

ひとくち 歎異抄

羅漢：阿弥陀様のお心はどういうものか。
「すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。」第一章



衆生のわれらを一人ももらず仏となさしめてお救い下さるお心です。

川越喜多院の五百羅漢



孟蘭盆会法要

お知らせ

寺務所より

敬吊

・田中徳子様(聞法者)(平成二二年三月十六日命終 九一歳)

・布施毅夫様(前世話人、前護持会副会長)、(平成二二年六月二八日命終 七八歳)

当寺にご尽力頂いたお二人が浄土へ還帰されました。生前のご功勞を偲び、念仏合掌して哀悼の意を表します。

◆法要のご案内

●報恩講

十月二十五日(日) 午前十一時より厳修。

●修正会

平成二二年一月一日元旦、午後一時より厳修。新年を阿弥陀如来のご尊前より出発致します。

◆聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会

毎月開催。午後一時半～四時半まで。講師は樸曉先生。和讃を学んでいます。日程は当寺にお尋ね下さい。(※十月は報恩講です)

●大経の会

十月十三日(火)、十一月八日(日)、十二月十九日(土) 午前十時～午後三時まで。細川巖著正信偈讃仰を学んでいます。講師は佐々木師

と住職の担当月別。お弁当持参して下さい。

●我聞の会

十月二十八日(水)、十一月二十日(金)、十二月八日(火) 午後二時～四時まで。講師は住職。

●微風学舎

毎月開催。午後七時～九時まで。講師は副住職。「顕浄土」の教学を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。

●さいたま親鸞講座

午後二時～四時まで。会場は大宮川鍋ビル。十月十七日(土)、十二月十二日(土)、平成二二年二月十三日(土)。

●真宗のつどい

十月十四日(水)、十二月二十三日(水)。会場は埼玉県内の寺院。ご参加の際はお寺にご連絡下さい。

●『法然と親鸞』の公演が十一月十五日～十二月十五日まで、青山劇場(渋谷)で行われます。詳細は当寺までご連絡下さい。

●お願い

ご自宅で法事の際は駐車場をご利用下さい。宜しくお願いします。



青沢 光昭

ご先祖に少し多めの夏料理意地張りて小さき虫の強き脚

西木 順子

山人は「のぼる」という名夏の霧

萩の花手に小さくて明治の本

陽がさしてあちらとこちら草の種子

花岡 要

いと涼し床屋がえりの青田かな

炎熱にひるまぬ松葉牡丹かな

釈 義深

大勢で裁判いぢめ地獄絵図
経を読む口から邪剣飛んで来る
現世でも二河白道は現れる

短歌



赤秀 品枝

集中豪雨名もなき川の反乱に自然
のいかりなすすべもなく

腰痛に悩む婆々に夏風邪のふたり
の孫はだっこをせがむ

篠原 潤子

琥珀色光かがやくワンコの目純粹
なままだあるがまま

何想う二才の仔犬鼻先をゲージの
すき間にチョツと出して

言い合いの口調を聞いてスゴスゴ
と立ち去る仔犬空気がよんでる

月の無い夜空に向かい何想うつぶ
らな瞳を仔犬はうるませ

洗濯屋バス停スパー病院郵便局
が近い幸せ

ジャバジャバ心が荒れるこんな夜
はボタンはり糸針箱をかたす

梵鐘



花岡 要 画

憂いをおびた少年のようなま
なざしで人気の奈良興福寺の阿
修羅像(国宝)は、原型の粘土
像ではもつと険しい表情をして
いたことが、九州国立博物館な
どによる初のX線CTスキャン
調査で判明、原型像の正面の顔
は細面で目はきつくり上り、
完成像のふつくりとした顔や
「涙目」といわれるイメージと
異なっていた。興福寺国宝館の
金子啓明館長は「像の細かい整
形はもともと漆に木くづを混ぜ
たもの」を表面に塗り重ねてお
こなっている。「計画を変更
して穏やかな表情にしたのかど
うかは、判断できない」と話し
ている。という新聞記事を読ん
で、これは仏師(作者)の心の
変化の現われ、ではないか?
一二七五年も過ぎて判明され
たのである。そんな心の変化
に作者自身も気づいていなか
ったかも知れない等と楽しい
空想をしている倅せな自分を
発見した。合掌。

釋尼民徳